

日本環境共生学会

第20回記念（2017年度）学術大会実施報告

大会実行委員長・高知工科大学 中根 英昭
大会実行副委員長・高知工科大学 那須 清吾
大会実行委員・高知工科大学 柴田 清孝
大会実行委員・高知工科大学 古沢 浩
大会実行委員・高知工科大学 百田 佐多生
大会実行委員・高知工科大学 吉村 耕平

1. はじめに

2017年9月22日（金）～24日（日）の3日間、高知工科大学（永国寺キャンパス）において、日本環境共生学会 第20回記念（2017年度）学術大会が開催された。本学術大会は、高知工科大学によって、20周年事業の一環として共催された。大会テーマは「気候変動への適応策と緩和策—地域からの統合的展開—」である。

第20回記念ということから、会期を3日間とらせて頂き、幾つかの効果が生じた。第一に、テクニカルツアーが充実したこと、第二に、ポスターセッションと理事会を第2日目に配することによって、十分に時間をとれたことである。第三に、「Welcome セッション」で主催大学の学生・スタッフの多くの発表を行わせて頂けたことにより、その後の学会のサポートに徹することが可能になった。副次的な効果として、サポートを通じた学生の教育効果も大きくなった。

初日である9月22日に、午前は、南国市の津波避難タワー及び五台山展望台、午後は、早明浦ダム及び榊相愛本社へのテクニカルツアーが実施された。2日目の9月23日午前には、「Welcome セッション」；高知における気候変動適応データ解析、及びポスターセッションが行われた。午後には開会式及び「気候変動への適応策と緩和策—地域からの統合的展開—」をテーマ

とした公開シンポジウムが開催された。

3日目の9月24日には、3会場での並行セッションにおいて口頭発表が行われた。各セッションでは、気候変動と地域というキーワードを軸に、緩和・適応のみならず、リスク管理、生態系、資源循環、経済など、本学会に共通した環境共生というキーワードのもと、熱心な議論が展開された。

2. テクニカルツアー

9月22日午前には、参加者の高知龍馬空港への到着時刻に合わせて空港からの送迎を繰り返し、①南国市津波防災タワー見学、②五台山展望台から高知市の防災を考える見学を実施し、午後から、③早明浦ダム、④榊相愛株式会社本社の見学を行った。雨天にもかかわらず、22名の参加者による熱心な質疑が行われた。

午前の①、②の見学については、磯部雅彦高知工科大学長が「東日本大震災を踏まえた高知県における南海トラフ地震津波対策の現状」に関する資料を用意して下さり、津波対策の全体像を踏まえて、津波防災タワーや高知市内の河川の見学を行うことができた。

早明浦ダムの見学では、まず、早明浦ダム管理所の方に「四国のいのち～早明浦ダム～」と題したプレゼンテーションをして頂いた。早明浦ダムの4つの目的、①洪水調節、②河川環境の維持（流水の正常な機能の

維持), ③新規用水の供給(吉野川の水利用と新規用水), ④発電, について具体的に説明して頂いた。また, ダム貯水池周辺の山林の間伐等の整備も行い, 「緑のダム」整備にも力を入れていることや, 建設時からの早明浦ダムの歴史についても説明された。中でも, 毎秒1,000トンの放流の動画には見学者一同圧倒された。しかし, 2005年9月の台風14号の際には, 貯水率0%の渇水状態の中, 最大毎秒5600トン流入する水を貯水し, 放流量を毎秒800トンに抑えることによって下流の洪水を防ぎ, 同時に水不足を解消したとのことであり, 台風の際の流入水量の凄まじさを実感させられた。プレゼンテーションの後, ダムの内部を含むダムサイトの見学をさせて頂き, 約2時間にわたる見学の後, 早明浦ダムを後にした。

最後の見学地である(株)相愛本社では, 雨の中を1996年1月に完成した数棟の木造の建物が迎えてくれた。本社全体が里山の斜面に建てられており, 水源は堀り井戸や岩盤流である。汚水は敷地内でクローズ処理する他, 半地下構造の社屋により自然エネルギーによって冬暖かく夏涼しい社屋を実現するなど, まさに「自然共生オフィス」となっていた。このような100人規模の社屋が1997年の京都議定書採択以前に建てられ, 20年以上にわたってオフィスとして使用されてきたことは驚くべきことである。1972年に発表されたローマクラブの報告書「成長の限界」に衝撃を受け, 経営の考え方や視点の基本としてこられた当時の社長(現会長, 高知工科大学社会連携センター長)の永野正展氏の思想が体现されたものとのことである。



相愛本社にて

3. 開会式・学会賞授賞式・特別講演

開会式は, 林良嗣学会長, 開催校の磯部雅彦学長からの挨拶によって始められた。続いて, 日本環境共生学会学会賞授賞式, 最後に, 林良嗣会長による特別講演が行われた。学会賞授賞式では, 木村美智子表彰委員長による挨拶の後, 林良嗣会長から各賞が授与された。受賞者は次の方々(敬称略)である。

論文賞; 木谷忍(東北大学)

論文賞; 長谷川明子・加藤博和・夏原由博(名古屋大学)・林良嗣(中部大学)

著述賞; 馬奈木俊介(九州大学)

奨励賞; 木下朋大(関西大学)

環境共生功労賞; 国際影響評価学会2016大会ローカルアレンジメント委員会

(代表 福井弘道)



林良嗣会長特別講演

林良嗣会長による特別講演は, 直前にタイのバンコクで開催されたSSMS(Society for Social Management System)学会第11回大会からの「聖火リレー・聖火台点灯」的な位置づけで行われた。SSMS 11thシンポジウムのメインテーマ”Managing Smart and Resilient Society”と今回の学術大会のテーマ「気候変動への適応策と緩和策—地域からの統合的展開—」に共通の重要なテーマである「レジリエンスとスマートコミュニティ」というタイトルの下, ローマクラブによる報告書「成長の限界」以来の問題意識の柱であるサステナビリティの観点から問題を概観し, 人間自身にとって重要な環境の指標であるQOL(生活の質)がレジリエン

ト（回復可能）であるためにはスマートコミュニティが重要であることを論じた。

4. 公開シンポジウム

公開シンポジウム「気候変動への適応策と緩和策—地域からの統合的展開—」は、日本環境共生学会が主催し、公益社団法人土木学会および高知工科大学による共催、文部科学省のSI-CAT（気候変動適応技術社会実装プログラム）の後援を受けて一般公開され、インターネット中継も実施された。参加者は、約70名であった。

基調講演に先立って、コーディネータの古沢浩実行委員（高知工科大学教授）から趣旨説明が行われ、続いて木村富士男 SI-CAT プログラムディレクターからの挨拶文が紹介された。

最初の基調講演は、高知工科大学磯部雅彦学長により、「沿岸域における地球温暖化への適応策の選択肢」と題して行われた。次に、土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター（ICARM）小池俊雄センター長により、『「エンド トゥー エンド」の気候の変化への適応」と題する基調講演が行われた。更に、名古屋大学大学院環境研究科加藤博和教授による「気候変動時代を見越した都市・交通戦略の検討手法—地域からの統合的展開を支援する—」、永野正展高知工科大学社会連携センター長による「未利用森林資源活用による新たなエンジン構築—木質バイオマスエネルギーの地産地消—」の2件の講演が行われた。続いて、講演者の小池センター長、加藤教授、永野センター長、及び森田徹雄高知県土木部副部長によるパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションではパネリスト間の討論に加え、フロアからの質問・コメントも相次ぎ、活発な討論が展開された。

5. 学術セッション

2日目の学術セッションでは、企画セッション（Welcome セッション）「高知における気候変動データ解析」において4件の口頭発表が行われた。ポスターセッションでは1時間のコアタイムが設けられ、11件

のポスター発表が行われた。3日目の学術セッションでは、企画セッション「地域経済と環境の評価手法」において4件、一般セッションにおいて29件の口頭発表があった。3つの口頭発表会場と控室がほぼ隣り合っており、その廊下でポスターセッションを行うコンパクトな会場レイアウトであったこともあり、熱心な討論が交わされた。2日目、3日目を合わせると、口頭発表は合計37件、ポスター発表は11件であった。

6. おわりに

23日夜には、約35名の参加で、高知工科大学食堂において懇親会が開催された。高知工科大学磯部学長にもご参加いただき、和やかで楽しい「イブニングセッション」となった。

以上をもって3日間にわたる学術大会が終了した。全体で75名ほどの参加者があった。盛会裡に終えることができたのも、大会準備や運営に際し多くの方々、見学先の方々にご協力、お力添えを賜ったことによるものである。特に、高知工科大学環境理工学群の中前久美氏には、実行委員にも勝るとも劣らない仕事をして頂いた。また、日本環境共生学会事務局及び山中英生常務理事による手厚い学術大会サポート体制には、準備段階から大変お世話になった。あらためて、すべての関係者の皆様に感謝申し上げます。